

「聴く活動」を通じた総合的な表現遊び

—「幼児と表現」における授業実践の検証—

Integrated Expressive Activities Through “The Listening Activities”: Verification of Practice in “Infant and Expression”

中村 礼香

Ayaka Nakamura

鹿児島女子短期大学

保育者養成校における「幼児と表現」の授業の中で、非認知能力を高めることをねらいとした総合的な表現遊びを授業の中で実践し、学生の感想を基に実践の分析を行った。実践では「聴く」活動を主体として、絵を描くことによる音の視覚化の活動や、自然や生活の音をオノマトペで表現する創造的な表現活動に発展させた。学生たちの記述には、「想像力」「発想力」「考える力」といった非認知能力に関する言葉や、「感じたままに表現する」「感性」「達成感」といった幼稚園教育要領等に見られる言葉が多く出現しており、幼稚園教育要領等や非認知能力に関する学生たちの理解を深めることができていることは確認できた。今後は「素材」を用いた音遊びの実践を検討し、学生が保育者になった際にすぐに実践できるよう、授業の質を高めたい。

Keywords : the listening activities, non-cognitive skills, the sound play

キーワード : 聴く活動 非認知能力 音遊び

1. はじめに

1989年に幼稚園教育要領が改訂された際、保育内容は6領域「健康・社会・自然・言語・音楽リズム・絵画製作」から5領域「健康・人間関係・環境・言葉・表現」となり、それまでの「音楽リズム」と「絵画製作」から領域「表現」と改められた。これにより、音楽や造形といった表現活動だけではなく、子どもたちの何気ない仕草、言葉、表情なども「表現」と捉え、保育者が受け止めて共感することが大切であると幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の中で述べられている。また2017年に幼稚園教育要領等が改訂された際、音楽活動においては、「大切なことは、正しい発声や音程で歌うことや楽器を正しく上手に演奏することではなく、幼児自らが音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わうことである。」¹⁾と述べられている。さらに、領域「表現」において追加された点は、「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。」²⁾である。歌唱活動や器楽合奏等の音楽活動ではなく、身近な音を用いた活動を取り入れることが示されている。今回の改訂では、幼児教育において育みたい子どもたちの資質・能力として「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力」の3つの柱が示され、これらの資質・能力が各領域におけるねらい及び内容に基づいて展開される保育活動全体を通じて育まれたときに、幼児期の終わりごろには具体的にどのよう

な姿として現れるかを、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として明確化された³⁾。

以上のことから、幼児期の教育において求められていることは遊びを通じた技術の獲得ではなく、非認知能力を高めることだと言える。筆者は2018年に音楽表現活動を通して育まれる資質・能力を、前述の3つの柱や10の姿に沿って分析した⁴⁾。その結果、音楽活動を通して様々な資質・能力を高めることができるという結論に達したが、音楽のみの活動に焦点を当てて分析したにすぎない。幼児が音や音楽で十分遊べるよう、さらに幼稚園教育要領等の中で領域表現の解説に幾度となく出てくる「素材」を用いた活動ができるように、学生たちに事例を提示しながら具体的に教える必要がある。学生は、自身の幼児期、児童期において「音」を用いた音楽活動をほとんど経験していないことから、幼稚園教育要領等を解説しても、実際に保育現場でどのような活動を実践すれば良いのか想像できないようであった。また筆者自身もこれまでの授業の中では、リトミック、わらべうた遊び、歌唱、器楽合奏といった音楽活動は行っているが、自然の音を用いた活動や、造形と音楽を融合させた総合的な表現活動などはあまり行ってこなかったが、昨年度より新しい幼稚園教育要領等に示されているように自然や身近な音や他領域も意識した音遊びを学生たちに紹介できるような内容を検討し、試行錯誤しながら授業を行っている。

そこで本研究では、昨年度より新しく取り入れた「聴く

活動」を主体とした総合的な表現遊びの授業実践を振り返り、来年度以降の授業改善に繋げることを目的として、授業実践報告と自身の授業の検証を行う。

2. 非認知能力について

近年、「非認知能力」という言葉が良く聞かれる。「認知能力」は漢字テストや計算テストなどの学力テストによって点数化して測定することが容易な力であることに対し、「非認知能力」はコミュニケーション能力や思いやりなどが点数化して測定することが困難な力である⁵⁾。

「非認知能力」を初めて提唱したのは、2000年にノーベル経済学賞を受賞したジェームズ・J・ヘックマン (1944-) である。ヘックマン (2015) は、著書の中で「人生で成功するかどうかは、認知的スキルだけでは決まらない。非認知的な要素、すなわち肉体的・精神的健康や、根気強さ、注意深さ、意欲、自信といった社会的・情動的性質もまた欠かせない⁶⁾」。「最近の文献の一致した意見は、人生における成功は賢さ以上の要素に左右されるとしている。意欲や、長期的計画を実行する能力、他人との協働に必要な社会的・感情的制御といった、非認知能力もまた、賃金や就労、労働経験年数、大学進学、十代の妊娠、危険な活動への従事、健康管理、犯罪率などに大きく影響する。」⁷⁾と述べている。また、OECD (経済協力開発機構) は、2015年に「社会情動的スキル」を提唱した。社会情動的スキルは、「(a) 一貫した試行・感情・行動のパターンに発言し、(b) 学校教育またはインフォーマルな学習によって発達させることができ、(c) 個人の一生を通じて社会・経済的成果に重要な影響を与えるような個人の能力」と定義される⁸⁾。これらのスキルは、「目標を達成する力 (例: 忍耐力、意欲、自己制御、自己効力感)」「他者と協働する力 (例: 社会的スキル、協調性、信頼、共感)」「情動を制御する力 (自尊心、自信、内在化・外在化問題行動のリスクの低さ)」を含んでいる⁹⁾。

池迫ら (2015) は「認知的スキルと社会情動的スキルは相互に作用しお互いに影響を与え合うことから、切り離すことはできない。創造性や批判的思考といったスキルは、認知的及び社会情動的側面の両方を融合することによってより理解しやすくなる。」¹⁰⁾と述べている。また、中山 (2018) は、非認知能力を高めることは、諸々の認知能力や思考系能力を高めることにも重要な影響を与え、逆に言えば、自己肯定感や非認知能力がぐらつてしまうと認知能力や思考系能力にもぐらつきが生じてしまうと述べている¹¹⁾。中山は著書の中で認知能力と非認知能力の関係性を図1のように示している¹²⁾。さらに、非認知能力は多岐に渡り、定義としてははっきりと示すことができないが、中山は図2のように言語化している¹³⁾。



図1 自己肯定感から認知能力までの全体像

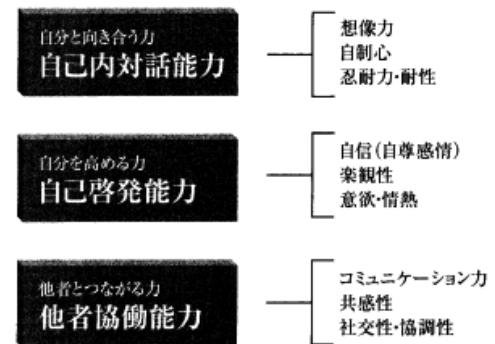


図2 中山が提案するオリジナルな非認知能力

以上見てきたように、非認知能力は一生を通じて必要な能力であり、認知能力を高めるためにも必要な能力である。さらに、経済学者やOECDがこれらの能力について提言していることから、国の経済的活性化を図るためには、非認知能力が必要であることがわかる。この非認知能力を高めるためには、幼児期から家庭や学校教育での経験や教育が重要であり、具体的に幼児教育において育みたい子どもたちの資質・能力として非認知能力を言語化したものが、幼稚園教育要領等に示されている3つの柱と10の姿であると考えられる。

次項からは筆者が取り組んだ「聴く活動」を通じた授業実践を学生の感想を基に分析し、学生たちが幼稚園教育要領等と関連して授業を捉えることができたかどうかについて検証する。

3. 授業実践について

文部科学省より2017年に幼稚園教育要領等の改訂が行われると同時に、教職課程コアカリキュラムが提示された。それに沿ったモデルカリキュラムも提示された際、筆者は造形表現担当教員と身体表現担当教員と共に、カリキュラムの再構築を行うためにそれまでの授業を振り返り、モデルカリキュラムに足りない部分を抽出した¹⁴⁾。それにより筆者が足りないと感じた部分は、「幼児と表現」の授業モデル4)に示された「自然、生活、文化における様々な表

現に触れ、感じたことを共有したり、そのイメージを再構築し表現したりする機会を設ける。」であった。幼稚園教育要領等に新たに追加された、「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。」や、「表現」の内容(1)「生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。」といったことがこのままの授業内容では学生に伝えることができないことに気付いたのである。また、音楽活動だけに特化してしまい、他領域や造形等を意識した総合的な表現活動を取り入れることができていなかったことも反省点であった。これを踏まえ、2019年度の授業から、わらべうた遊びやリトミックといった音楽活動に加え、音の視覚化、サウンドスケープ、絵描き歌を取り入れることとした。今回は、音の視覚化とサウンドスケープの活動を学生の感想を基に検証する。

3-1 音の視覚化

(1) 実践内容

音楽と造形を融合させた活動として、打楽器の音を視覚化し、図形楽譜にする活動を行った。授業の流れは以下のようなになる。

- ① 目を瞑った状態で打楽器の音を聴き、その音をイメージしてクレヨンや色鉛筆を使って抽象的な絵で表現する。
- ② ①を終えた後、各自 A4の紙に自由に抽象画を描き、それを5、6人程度のグループで繋げて図形楽譜とし、打楽器を用いて合奏する。

この活動は、領域表現の内容(4)「感じたこと、考えた

ことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。」に関連させて行ったものである。

①の活動において対象とした楽器は、大太鼓、トライアングル、シンバルのような音が響くもの、マラカス、ウッドブロック、ギロ、木魚のようなすぐに音が無くなるもの、ヴィブラスラップ、レインスティックのような長く鳴り続けるものである。学生の感じ方は人それぞれであるが、大太鼓やシンバルのような響く音は、写真1のように周りに響きを表現しているのが特徴的であった。また、マラカスは筆者が何度か続けて鳴らしたため、写真2のように小さな形がたくさんちりばめられている絵が多かった。

②の活動においては、一人一枚ずつ描いた図形楽譜をグループで1つの曲にするにあたり、音楽の始まり、盛り上がり、終わりを考えた楽譜の並びを考え、実際に音に出して演奏するという音楽創りを行った(写真3)。

(2) 学生の感想の分析

学生からの感想には以下のような記述があった。

- ・ 音を聴いて色は大体想像しやすかったけど、形のイメージがとても難しかった。
- ・ 周りの人と感性が全く違って面白かった。
- ・ この活動は正解、不正解がなく、誰もが自由に楽しんですごく良いと感じた。
- ・ 図形楽譜は発想力がとても必要だと感じた。
- ・ 紙に自分の感覚で受け取った音を表現するというのは、リズム感や表現力への獲得へ繋がると思った。

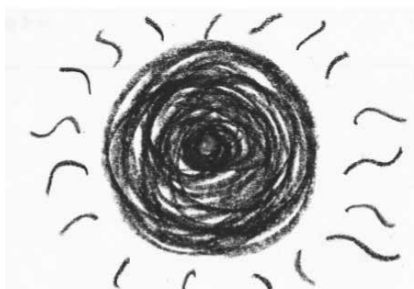


写真1 大太鼓の音を図形化したもの

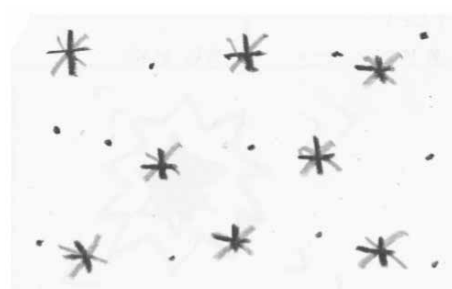


写真2 マラカスの音を図形化したもの

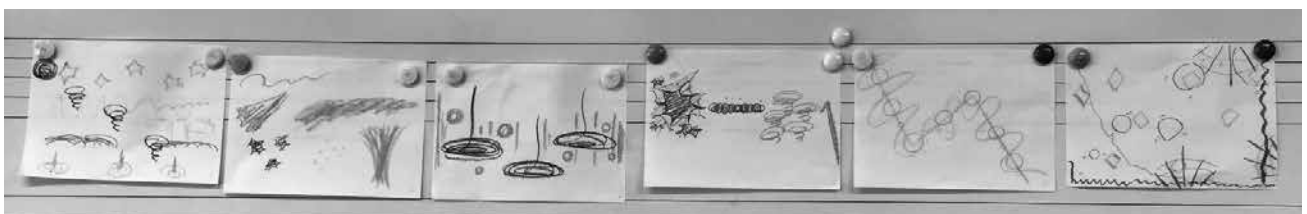


写真3 図形楽譜

- ・ 自分が感じたままに絵を描いたので、一人ひとりの個性が出た。音だけでいろんなイメージが膨らんでそれを絵にすることで、自由に描くということ、音を聴くということにもなり、子どもの想像力を膨らませられ楽しくできるので子どもたちにもやりたい活動だった。
- ・ 図形楽譜を初めて描いてみて、耳だけで音を聴いたイメージを表すことで、想像力や、創造力、表現力がとても身につくと感じた。
- ・ 楽器を用いて実際に演奏することは難しかったけど、できた時は達成感を味わうことができた。
- ・ 自分で書いた図形楽譜を見て、楽器を演奏すると気持ちが込めやすかった。
- ・ 楽譜が読めない、またあまり絵が好きではなくても自分が感じたものをそのまま表現するという事は私たちの年代でも楽しめたので、幼児も楽しく遊ぶことができるだろうと思った。
- ・ 絵の具や切り絵などいろんなものでも作ったら楽しいだろうと感じた。
- ・ 音は音符と楽譜だけでしか表せないと思っていた考えが覆った。

学生たちの感想には、幼稚園教育要領等に記載されている「イメージ」「感性」「達成感」「感じたままに」「表現力」といった言葉や「絵の具や切り絵」といった素材に関わる言葉、「創造力」「想像力」「個性」「発想力」といった非認知能力に関わる言葉がたくさん見られた。また、表現することについて「気持ちが込めやすい」「正解不正解がない」「自由に楽しめる」といった記述や、「音は音符と楽譜だけでしか表せないと思っていた考えが覆った」といった表現に対する固定概念と違ったことへの驚きなどが見られた。

実はこの授業を行ったのは、1年次の5月ごろであり、まずは表現活動を体験することが大切だと考え、まだ幼稚園教育要領等の領域表現に関する講義を行っていなかった。それにも関わらず、感想を書かせてみると学生たちから上記のような言葉出てきたことは驚きであった。授業の中で一つひとつの活動に取り組む際に、その活動を行う意図やねらいなどを学生たちに質問し、考えさせいる。その際、あまり活発に意見が出てくることはなかったが、各自それぞれに考えていることは、この感想を通じて知ることができた。音の視覚化の活動は、10の姿の「③協同性」「⑥思考力の芽生え」「⑧数量や図形、標識や文字などへの関

心・感覚」「⑨言葉による伝え合い」「⑩豊かな感性と表現」に繋がり、非認知能力としては、想像力、創造力、発想力、コミュニケーション能力、思考力、表現力、聴く力、集中力といったことが高まる活動だと考えられる。学生たちからたくさんの方の気付きを引き出すことのできるこの活動は今後も続けたい。

3-2 サウンドスケープ

サウンドスケープ (soundscape) は、1960年代にカナダの作曲家、R. マリー・シェーファー (1933-) によって提唱された概念で、日本では「音の風景」と訳される。身の回りの自然の音や生活の音を意識的に聴き、耳で捉えた風景を視覚化したり、言語化したりする活動である。

(1) 実践内容

マリー・シェーファー著「音さがしの本」には、子どもができる音に関するエクササイズが100種類掲載されており、エクササイズ45~47に「音をあらわす言葉を作る」とある¹⁵⁾。これを保育に活用すべく、以下のような授業実践を行った。

- ① 学校の周辺を散策し、聴こえた音を集めてメモする。
- ② 聴こえた音からオノマトペを作る。

この実践は、領域表現の内容 (1) 「生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ」、(4) 「感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする」だけではなく、領域言葉の内容 (2) 「したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりしたことを自分なりに言葉で表現する。」や領域環境の内容 (4) 「自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。」といった他領域も意識した活動である。

音を聴いて言語化する活動では、固定観念を捨て、聴こえたままにオノマトペで表現するように伝えた。学生は様々な音をオノマトペにして記していたが、落ち葉の音は多くの学生が「カサカサ」「パリパリ」と書いており、同じような表現が多かった。逆に多様な表現があったのはヘリコプターの音である。4つのクラスで別々の日、別々の時間帯で行い、2つのクラスのサウンドスケープ中にヘリコプターの音が聴こえた。2つのクラスを合わせて79人の受講者中、44人の学生がヘリコプターの音を記録していた。その結果を表1に示す。似たような表記はあるが、27種類程度の言葉が出てきた。

表1 学生が記録したヘリコプターのオノマトベ
(括弧内は人数)

ヴウウウウウ	バラバラ (2)
ガゴ	ブーブー (3)
ガルルル	ブーン (2)
グァングァン	ブォー
グウングウーン	ブォーバタバタ
ゴォーゴォー (2)	ブォーンブォーン (4)
ゴーゴー (2)	ブブブブ
デュルル	ブルブル
ドゥー	ブルブル (3)
ドゥーンドゥーン	ブルルル (3)
ドゥオン	ボォ
ドゥルドゥル (4)	ボォーボォーゴォー
ドルゥーン	ボリボリ
ババババ (2)	

(2) 学生の感想の分析

学生からの感想には以下のような記述があった。

- ・ 日常で音を意識して聴くという経験があまりなかったため、聴こえてくる音の種類が多さに驚いた。且に見えるものや耳に聴こえることを口に出すことは保育をする上で欠かせないことだと思うので、これからも大切にすべきことだと思った。
- ・ 自然の音などを聴くことで、言葉の表現も豊かになったので、保育でもこういうことをしたいと思った。
- ・ こどもたちには、考える力や集中力が身に付けられると思った。
- ・ 保育現場では、五感を働かせて保育者自身が気付かないといけなないので、少しずつ身の回りの音について自分なりに表現できるようにしたい。
- ・ 車や風の音だけじゃなくて、自分自身が自然と組み合わせさせて新しい音を作り出されることは素敵だと思った。
- ・ 集中して聴いていたら風の音までしっかり耳の中に入ってきた。

- ・ 音から季節を感じることができた。
- ・ 下手な虫の鳴き声も聴こえて、秋になり鳴くのを練習しているのかと思うと面白かった。
- ・ 友達と「今こんな音聴こえたよ！」と会話することでコミュニケーションが取れて良いと思った。
- ・ オノマトベが人それぞれ違って、友達と言い合ったりするのが楽しかった。
- ・ 車の音一つでも「ブーン」と聴こえたり、「ごおーっ」と聴こえたり新しい発見だった。
- ・ 水に石を投げた時「ポチャ」と私は聴こえたが、「ジャバン」と友達は聴こえていて、一緒に聴いた音でも人によってこんなに違うんだということに気付いた。
- ・ 鳩は「ポッポ」と鳴くと思っていたけど、「クック」という鳴き声だった。
- ・ 車も車種によって全く違ったエンジン音だということを知り、身近な音には色々な音があるんだと驚いた。
- ・ 風と言われれば、「ビュー」というイメージだったけど、秋風は風によって枯れ葉が移動する音のほうが強くと聴こえてとても驚いた。

感想には、大きく分けて3つの特徴があった。自分が保育者になった立場で考えたこと、音を聴いて感じたこと、オノマトベで表現した際に感じたことである。まだ実習にも行っていない1年生であるが、この活動を保育者として行ったときに子どもたちに「考える力」や「集中力」、「言葉の表現力」を高めることができると感じたり、保育者として「五感を働かせることが大切」と述べたりしているものがあつた。1年次からただ受け身で授業を受けているだけではなく、保育者としての実践力を高めたいと考えていることが伝わってきた。また、感じたことを友達と「共有」することによって、「コミュニケーション」が取れると気付いた学生もいた。これは、幼稚園教育要領等でも求められていることである。

この活動を行ったのは、1年次の10月である。枯れ葉が風に運ばれる音や、自分たちが枯れ葉を踏んだ時の音、虫の声などから秋を感じる学生が多かった。またそれらの音をオノマトベにする際に、友達との感じ方の違いや、思い込んでいた音と違ったことに対する驚きなどが記載されて

いた。オノマトベにする活動を行ったことで、学生たちの感性も高まったようである。

4. 考察

今回検証した2つの実践は、学生の感想から、幼稚園教育要領等に沿った内容の記述や非認知能力に関わる記述がみられたことから、こちらが意図したことは伝わったと言って良いと考えられる。また、学生たち自身の感性を高めることもできているようである。ただし、今回の授業実践の内容に「素材」は取り入れられていないことが問題である。学生の感想にあったように、図形楽譜を絵の具とペットボトルのキャップのような様々な形の素材を用いてスタンプをするような活動で製作したり、紙を切って音の形を作ったりすることも案として面白い。また、雨の音を、素材を用いて表現する場合に、保育者として環境を整えるためにはどのような素材を保育室に用意するかという問いを行い、大豆や小石などの上から落とす素材と、空き箱やボウルなどで受け止める素材を答えさせるということは行っているが、実践まで至っていないのが現状である。今回の分析で、幼稚園教育要領等や非認知能力に関する学生たちの理解を深めることができていることは確認できたため、今後はこれらの活動にさらに素材を取り入れて発展させ、保育現場での活動に活かすことができるような授業実践を考えていきたい。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」株式会社フレーベル館, 2018, pp.240
- 2) 同上, pp.244
- 3) 厚生労働省編「保育所保育指針解説」株式会社フレーベル館, 2018, pp.5
- 4) 中村礼香「表現活動を通して育まれる資質・能力—音楽表現活動に視点をあてて—」鹿児島女子短期大学「紀要」第54号, pp.69~73
- 5) 中山芳一「学力テストで測れない非認知能力が子どもを伸ばす」東京書籍, 2018, pp.13~14
- 6) ジェームズ・J・ヘックマン著, 大竹文雄解説, 古草秀子訳「幼児教育の経済学」東洋経済新報社, 2015, pp.82
- 7) 同上 pp.168
- 8) 池迫浩子・宮本浩司「家庭、学校、地域社会における社会情動的スキルの育成—国際的エビデンスのまとめと日本の教育実践・研究に対する示唆—」ベネッセ教育研究所, 2015, pp.7
- 9) 同上 pp.7
- 10) 同上 pp.13
- 11) 中山芳一「学力テストで測れない非認知能力が子どもを伸ばす」東京書籍, 2018, pp.119
- 12) 同上 pp.118
- 13) 同上 pp.121
- 14) 松下茉莉香・中村礼香・小松恵理子「新幼稚園教育要領に基づく表現系科目のカリキュラム再構築について—音楽表現・造形表現・身体表現の観点から—」志學館大学教職センター紀要第3号, 2018, pp.57-69
- 15) R. マリー・シェーファー著, 今田匡彦訳「音さがしの本—リトル・サウンド・エデュケーション—」株式会社春秋社, 1996

(2020年12月25日 受理)